

中華人民共和国の鉱山を訪ねて (1)

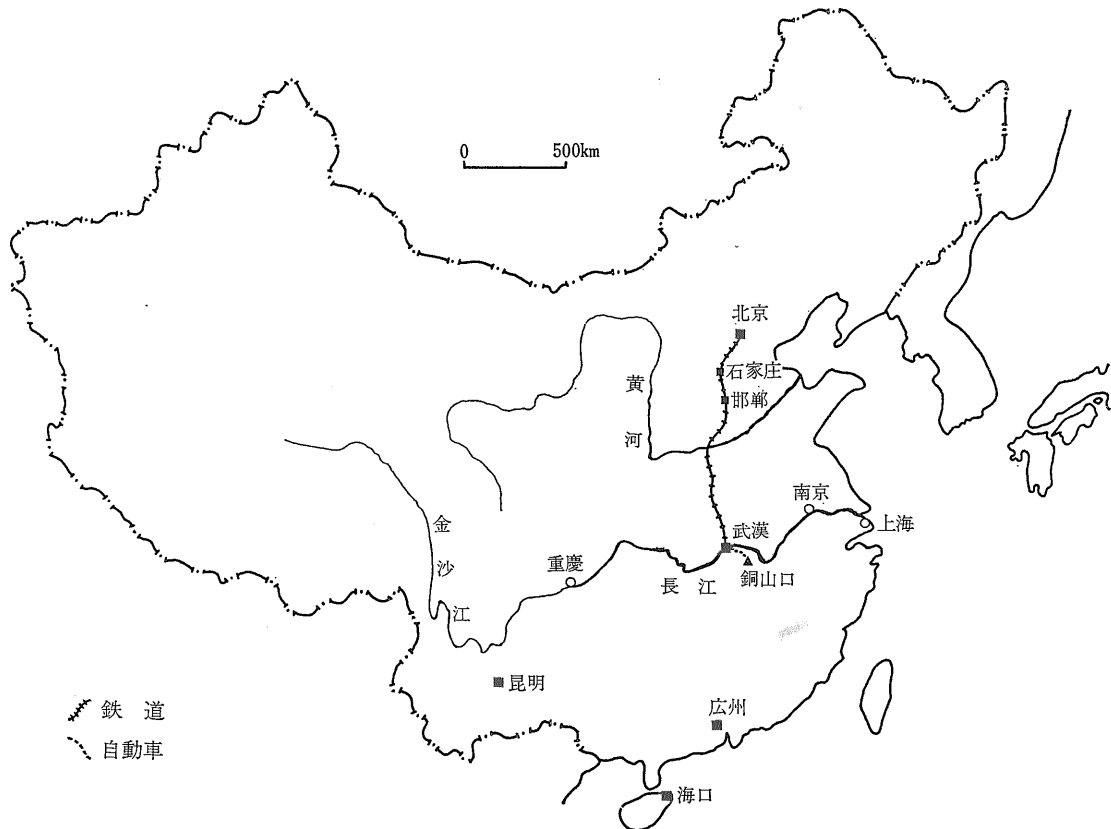
小 村 幸二郎
Kohjiroh KOMURA

はじめに

テヘランから北京経由で東京へ向うイラン航空800便は ヒマラヤ山脈の秀峰マナスル山 (8,125m) 付近で夜明けを迎える。それから眼下の風景は 神々しいまでに白く鋭い山の連なりから荒々しい岩肌の山岳地帯に変わり やがて 打ちひしがれたような岩石砂漠 強烈な光にうねる砂砂漠 そして 赤土の野から緑豊かな大平原へと移り変り テヘランを出発しておよそ7時間後に北京空港に到着する。長旅の疲れを癒やすに十分な時間がないだけに 多くの旅客は 北京空港到着後すぐに立上るが ドアが開いたからといって そそくさと機外へ出ることには許されない。先ず2~3人の兵隊が機内に入り 各人の旅券を預った後で 待合室へ行くことを許される。東京とテヘラン間のこのコースを何度か飛

び その都度北京空港の待合室までは行ったが この国に入国するのは今回がはじめてである。一体 入国手続やら税関検査などは どの程度わずらわしいのだろう。

7月に入って間もない曇り日の夕暮れ 北京経由テヘラン行のイラン航空801便には空席があった。北京行の航空機は殆んど満席だと聞いていただけに 意外である。ほぼ定刻に 南へ向って出発した。東京から北京まで 西へ向って朝鮮民主主義人民共和国の上空を横断できるならば わずか2時間30分ほどの飛行であるが世の中の難かしい約束事のために 一度南下してから北上して 4時間余りも飛ばなければならない。どこまでも広い大空なのに 何故 一般の旅行客を運ぶ飛行機が 最短距離を飛ばないのだろう。定刻到北京空港に



旅行行程図

着いた。入国手続は全く簡単 税関検査はない。機内アナウンスでは地上の気温は25°Cということだったが 鞆を受取るまでの待合室のむし暑さからは どうしてもこの気温は信じられない。午後11時 暗い北京の夜更けである。

いつものことながら 荷物は多くない。南米旅行から帰って間もない今回の旅行だけに 旅行鞆の中味は殆んど変ってはいないが 過去10数年の間こつこつと蓄積してきたデータだけ やけに目あたらしく見える。しかし そのデータが 今回の旅行にどれほど役立つかは全く判らない。国土面積959.7万平方キロメートルは 日本の国土面積のおよそ25.4倍である。この広大な国土の点にも満たない幾つかの場所を訪ずれてみたとしても この国の全貌をうかがい知ることは難かしい。しかし この短かい旅行によって 従来の邦文の印刷物の内容に若干の誤まりがあることに気付き また この国の鉱床や鉱業の特異性のようなもの的一端を知り得たことなど 得られたものは比較的が多かった。

発展途上国の一つと見なされてはいるものの これほどの大国の首都の夜が これほど暗いとは全く予想もしなかった。空港からこの国の最高学府として知られる清華大学に近い友誼飯店までおよそ32キロメートル 冶金工業部（日本式では冶金工業省）差廻しのマイクロバスは ヘッドライトを消したまま 時折 けたたましいクラクションを鳴らして 並木の道を走り抜けてゆく。ぼつんぼつんと灯るほの暗い街燈の下では 涼を求めてか 路上に憩う人々の姿がある。フォッグランプのか細い光を頼りに 自動車が相次いで通り抜けてゆくというのに 路上で憩い または トランプ遊びに熱中しているらしい人々は 一向に身の危険を感じてはいないらしい。よく交通事故が起らないものだが これも ヘッドライトを消して走る自動車の運転手が最大細心の注意を払っているからだろう。

マイクロバスは およそ30分で友誼飯店に到着した。友誼飯店の正式の名は北京友誼賓館である。英語名ではフレンドシップ・ホテルという。いかにも中国風の形態に色彩が目立つこの大きなホテルは かつて 中国と親密な関係にあったソ連の協力で建造されたということである。途方もなく広大な敷地内には 色とりどりの花や芝生に囲まれて 20余の建物があり

これらの建物を結ぶ道路には美しい並木が連っている。ホテルというよりは むしろ大学の構内といった感じである。

天井の高い室内には 重厚なベッドや整理箆筒が置かれ 大きな浴槽とともに かつての一流ホテルの名残りをとどめてはいるが やはり 時の流れを感じさせる古めかしさがしみついている。空調設備はなく がっちりとした木製の机の上に ぼつんと旧式の扇風機がのっているだけだ。最近ではほとんど見なくなったインク壺とペン 熱湯の入ったポットと湯ざましの冷たい水の入ったポット 袋入りのお茶 窓を開ければ中庭から蚊が飛び込んでくるし 床の敷物も調度品もかなりの年月を経ているには違いないが 隅々にまでみられる心づかいと 常に控えめで 笑顔を忘れない従業員には 好感がもたれると同時に すべての物を大事に使うことの尊さを教えられる思いである。

ホテルのロビーの片隅に両替所がある。いつもの海外旅行であればアメリカ・ドルのトラベラーズ・チェックを持ち歩くが 今回は 日本円のトラベラーズ・チェックを携行した。はじめての経験ではあったが 日本円と中国の元（円）との交換 そして帰国後は トラベラーズ・チェックのレートに無関係の現金化という わずらわしさが無いという点で便利であった。

鉱山調査への出発前日の夕刻 北京最大の新華書店を訪ずれてみた。北京の銀座通りとも云える王府井（ワンファーチン）の入口に建つこの本屋は かなり大きい。しかし 店内を隈なく探してみたものの 地質鉱床関係では「斑岩銅鉱床」という単行本が見つかっただけであった。価格は日本円で約70円である。鉱物資源の探査・開発は 現代化を急務とするこの国では 最も重要



北京北西部に位置する友誼飯店（賓館）
ソ連の技術協力によって建設されたといわれる中国風の建物である。
右手前はガードマン室。

視されている案件の一つであり 既に6万人の地質技術者が活躍しているらしい。大学や地質省に所属する6つの地質学院では こうした技術者の育成が積極的に行われているに違いないはずだが 一体 これらの技術者や学生が利用するに違いない地球科学関係の書籍は何処で販売されているのだろう。省別地図とこの本を購入して帰途に着いた。

中国側作成の日程通り 北京到着翌日から3日間は調査日程の最終打合せ 技術合作の指向性と問題点の意見交換 見学などでまたたく間に過ぎ去った。そして調査旅行出発の日を迎えることとなった。北京から湖北省へ それからベトナム社会主義共和国と国境を接する雲南省へ そして 広州から東シナ海とトンキン湾に挟まれる熱帯の海南島への旅のメモを綴ったこのつたない手記から 現代中国の何かを感じとって載ければ幸である。

夜汽車で武漢(漢)へ

調査旅行出発の日 北京は 早朝から激しく降りしきる雨に見舞われていた。厚いカーテンを開けると 冷んやりとした空気が シャワーで湿った身体に心地良い。朝食はいつもと変わらず 白粥と5~6種類の肉や野菜の料理である。日頃健康な故か 自宅で粥を食べることもなく 北京到着翌朝に 25年ぶりに粥を食べることになった。

それは昭和29年のことであった。秋色深い奈良県吉野の山深い里の農家で 水を飲ませてもらったことがある。漆塗りの椀一杯に汲んでもらった井戸水の冷んやりとした甘さは 早朝から歩き続けて渴ききった喉を心地良く潤してくれた。藁葺きの大きな家の庭先には 見事な柿がたわわに実り 裏山は 燃える様な紅葉に染まりつつあった。木目の浮き出た濡れ縁に腰をおろし 老婆の心づくしの漬物とお茶の接待にくつろいでいる折 その老婆は「間もなく家の者が皇から帰って来るから 一緒に昼食をして下さい」と親切に誘ってくれた。リュックサックを背負った当時の姿からは この純な人達の目には 学生に思えたらしい。招かれるままに昼食を御馳走してもらったが その時にすすめられた主食は粟粥であった。すべてが手造りの料理の味は格別であった。しかし 夜明けから日没まで 険しい山合いでの労働に励む人達の昼食にしては 余りにも軽く思えた。不躰

とは思いながら「昼食はいつもお粥ですか」と尋ねてみた。老婆は「はい この付近では 昼食はほとんどお粥です。南北朝時代 後醍醐天皇がお粥で飢を凌がれたのを想い 今もその徳を偲ぶ習慣として残っているのです」と 答えた。

そして粥という字の由来を教えてくれた。老婆の話では 弘法大師が空海と呼ばれていた若い頃 旅の途中で立寄った家で 粥を御馳走になった。木製の椀に粥を入れ 箸を椀の真中に置いて差出された空海は この時はじめて粥という食物があることを知った。そして箸と椀を作る形が 丁度 弓を2つ並べた形に似ていることから これに米の字を入れて 粥という字を作ったということである。この字の由来の真偽のほどは分らないが 粥を食べて人の徳と窮乏生活を偲ぶ習わしが数百年も続いていることを知って 山里に生きる人々の純な心にうたれた。若い日の想い出である。東西に走る幹線道路の長安街に面する天安門を過ぎて間もなく南へ曲り 更に東へ行った所に 北京駅がある。さすがに降りしきる雨の中では 自転車もきわめて少ない。マイクロバスを降りてから駅舎に入るまでの間に かなり濡れた。

2階の待合室には 4~5人の先客があった。天井は高く 広く そしてきわめて清潔な待合室の中は全く静かである。片隅に置かれた木製の大きな書棚には 各種の雑誌がある。落着いた色彩の雑誌を開いてみると それは全編 日本語で書かれていた。内容は 日本に関する記事や写真ではなく この国に関するものばかりである。先客は 幾つかの雑誌を取換えては読み 出発時刻になると 元通りに書棚に本を返して立去った。おそらく 今の日本でならば こうした光景はほとんど



北京 站(駅)のプラットフォーム
武昌行の急行列車(左)の乗務員(中央の2人)
は軽装で武昌までおよそ20時間を連続勤務する。

みられないだろう。

12時10分 武昌行の列車「141次京武宜快」は降りしきる雨の中を定刻に出発した。車内温度は28℃である。指定の7号車は4人のコンパートメントに仕切られている。丈が長く幅も広いベッド兼座席と枕にはゴザが敷いてあり冷んやりとして気持が良い。窓際の小さなテーブルの上には花が飾られ大きな湯呑が4個置いてある。そのテーブルの下には熱湯を入れた大きなポットがしっかりと固定されている。車内販売の袋入りの茶は7円ほどである。この国では一般に急須を使わず蓋つきの大きな湯呑に茶を入れて湯をそそぎ茶が沈んだところで飲むことが多く旅行する場合でもお茶と自分の湯呑を持参する人が多いらしい。もっとも急須は本来酒の燗をするのに用いられた物で中国のキビショ（急須と書く）から変ったものらしいから本場で使われないのは当然かもしれない。しかしホテルなどでは大きな急須が使われているようである。九州の或地方では急須のことをキビショと呼ぶがこの言葉を使っている人達は案外これを中国語だとは気付いていないだろう。室内の窓の上部には扇風機が取付けられ通路側には窓の内側に開閉できる網戸がある。決して新式の客車ではないが何よりも嬉しいことは清潔であることといつでもお茶を飲むことだ。

北京駅を離れて間もなく雨に濡れる緑の美しい田園風景に変わった。地平線はさだかではないがその果までも平坦な大地が続いているらしい。篠突く雨に打たれる永定河の水面は意外におだやかであった。しかしこの川に架かるルウコウチャオが780余年に亘って見つめてきた激動の歴史の流れと安らぎとは今も人々の心をうつ。氷に閉ざされた山を越えタクラマカン砂漠で生死をさまよい雨に打たれ風になぶられ富の源泉となる絹を求めて途方もなく長いシルク・ロードを辿った多くの旅人はこのルウコウチャオに到着して生気を取戻したという。かつてはマルコ・ポーロが憩いその著書である「東方見聞録」で紹介したこの橋はマルコ・ポーロ橋の名でも知られている。おそらくこの橋と周辺には架橋した金朝時代から今に至るまでの数々の面影が残されているに違いない。この橋の上から見る暁の月は美しく燕京(北京)八景の一つに数えられるほど著名な月見の場所であるということだが訪ずれて月を賞でるゆとりはない。午後1時同行の女性通訳が昼食を報せた。食堂車は8号車であった。清潔な車内に並ぶテーブルには真白のテーブルクロスがかけられ造花が飾ってある。メニュー

一に書かれている料理の種類は多くはないがこの料理には調理する人達の心がこもっているだけに実に美味しい。食堂車の一隅にある調理場では4人の男がせっせと働いている。野菜の泥を落とし皮をむく者リズミカルにそれを切る者大鍋で調理する者そして皿に盛り付ける者客が待つテーブルには灰色の木綿のズボンに白いブラウス姿の女性が料理を運んでいる。泥を落してから料理がテーブルに運ばれるまでそれほど時間はかからない。既に調理済の料理を電子レンジなどで暖めて出すというインスタント型の料理ではなく強い火力で香りとお味を出しながらの調理だけに一層食欲をそそるようである。将に食堂車という名がびったりである。白飯に野菜魚肉などをそれぞれ主とした料理が次々に運ばれてきた。そしてまたたくうちに丹精こめた料理は消え失せていった。仕上げはお茶である。

食後隣のコンパートメントに居る女性通訳と雑談をした。25才で独身のこの女性は冶金工業部の宿舎に住んでおり月収はおよそ8,400円食費こみの宿舎費は月収の約25%で無駄使いは殆んどしないと語った。そういえば中国第一の都会である北京でさえ化粧している女性もパーマネントをかけている女性もそしてきらびやかな服装の女性も見かけなかったから殆んどの人達が今は自分の欲望を押えて国造りに専念しているのかもしれない。学校は6・3・3・4年制で学費は不要医療費も眼科と歯科以外は無料らしい。この国では大学入試の一斉実施がかなり早くから行われているらしく試験の成績の良い順に良い大学に入学する習わしになっているそうである。一種の英才教育であろうがこうしたことは大学入試に限らず外国留学希望者にも適用されているようだ。日本の某大学に留学しているこの国の若者は2,000人以上の中から選ばれていると聞いたことがあるがこれなどはその典型例かもしれない。全く化粧をしていない健康色の頬は生々としている。25才ぐらいで結婚する女性が多いらしいからこの女性もいわば適令期にあるわけだが「私はこの仕事に生甲斐をもっており30才までは結婚を考えない」と語った。土曜も日曜も殆んど休まず北京に住んでいて故宮をはじめ訪ずれたというこの女性は日本語通訳としてきっと役所では貴重な存在なのであろう。

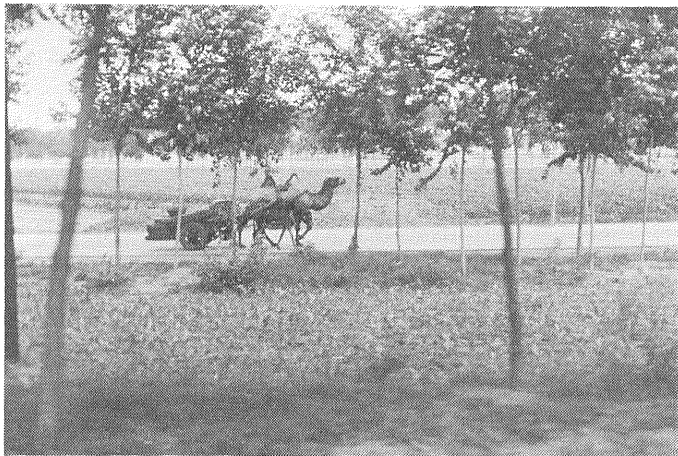
激しかった雨は止みまるで緑のジュータンを敷きつめた様な曇りがまぶしいばかりの光の中に果しもなく続いている。時折背の高い広葉樹が一直線に並んで

みえるのは 農道に沿う並木である。線路は少し登りになっているらしく 列車は木漏れ日の中を除行しはじめた。線路沿いに走る並木の道を 二瘤駱駝が荷車を曳いてゆく。シルク・ロードの難所タクラマカン砂漠やゴビ砂漠を行く駱駝の列の写真を見たことはあるが 一体 この国の駱駝の分布南限はどのあたりなのだろう。午後4時28分 石家庄に到着した。乗客が先を争うようにホームを走って行く。

13分間の停車時間を見計って 彼等の後を追ってみた。長いプラットホームの所々に見える罅割れは 何故か 紆余曲折の歴史の流れを想わせる。かなり多勢の客が居るのに 意外に話し声もあまり聞えない。ホームを走って行く人達の目的は焼肉その他 食物を買うことだった。おそらく急がなければ売り切れるのだろう。食堂車を利用する人が少なかったことから推察すると 旅客の多くは弁当持参なのかもしれない。

発車時刻が迫った。乗務員が 各乗車口の前に1人づつ立っている。こうした動作は 恐らく 出発時刻が迫っていることを示す役にも立っているのだろう。乗務員の多くは 紺色か緑色のズボンに白いブラウス姿の女性である。

陽射しが弱まり 並木が落す影は長くなった。通路側のガラス窓を開け 網戸を通る風に涼を求めながら

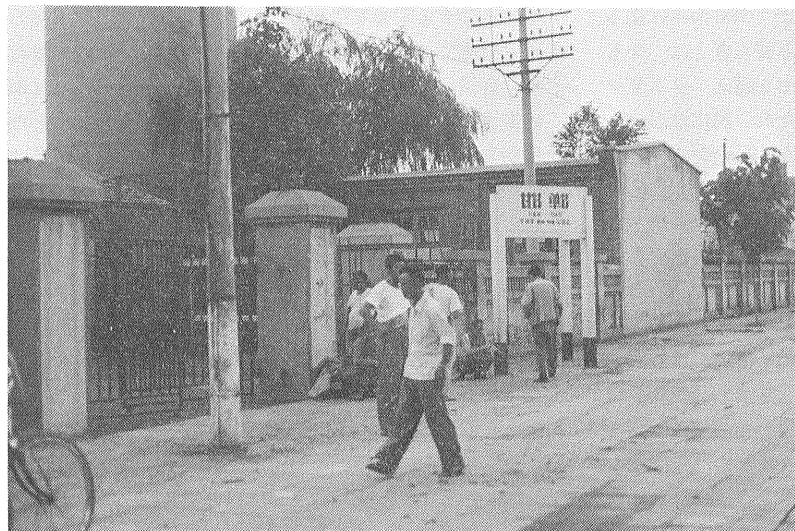


荷車を曳く駱駝
中近東あたりの駱駝と異って二瘤である。一般に駱駝は「砂漠の舟」として知られているが この写真を撮影した河北省中部地域の農業地帯ではこのように牛・馬の代りに使役されている。

うち続く田園風景のあまりの広大さに眺め入っている時突然 笑い声が聞こえた。隣のコンパートメントをのぞいてみると いつの間にはじまっていたのか 囲碁の勝負がついたところであった。長旅のつれづれに指す碁もまた格別であろう。碁に限らず 名人は 負けた時の指手を絶対に忘れないと聞いたことがあるが これは 凡人には中々できないことではないだろうか。

列車が静かに停った。ここは河北省最南端の邯鄲である。「邯鄲の夢」で広く知られる町ではあるが 駅の建物も改札口も小さく とてもこの故事に因みのある町には思えない。町を小川が流れ 高層の建物が殆んど見当らない 静かなたたずまいである。食堂車の調理場で 若い男が ジャガ芋と玉葱の皮をむいている。オレンジ色の塀は 残照に光ってはいるが そろそろ夕食の仕度が始まっているのであろう。

定刻に発車し 定刻に到着し 時刻表にきわめて忠実に 列車は南へ向ってゆく。午後8時 夕食の時刻である。もう闇に包まれ 開け放った窓からは緑の風が吹き抜けているというのに 車内の寒暖計は 32°C を示している。肉と魚をメインに



河北省最南端の邯鄲市の玄関にあたる邯鄲駅
登用試験を受けに行く若者が泊った家の主人が粟粥を作っている短時間の間に その若者は自分の一生の夢を見たという「邯鄲の夢」の故事で知られる所である。

した幾種類かの料理が運ばれてきた。毎日毎日朝・昼・晩と飽きもせず中国料理をよく食べられるものだがそれは日本料理と同じ様な調味料で味付けし強い火力できわめて短時間に料理するため油っこくないからだろう。いっどこで食べても唯々美味しいという他はない。都市ガスなどで調理した場合火力が弱くてこんなにさっぱりした料理は出来上らないのではなかろうか。食堂車には私達の他に6人の客が居た。ゆっくりとそして静かに語り合いながら箸を進めるその人達を見ていると日頃気ぜわしく食事をする空しさの様なものが感じられる。懸命に作った料理をじっくりと味わってこそ作る人と食べる人との心の調和が生れるのかもしれない。

夕食を終えた後前の客車に入ってみた。私達が乗っているのは云わばグリーン車で「軟席車」と呼ばれているものだが前の客車は普通の「硬席車」である。客席は文字通り座席も背当も厚い板で造られている。乗客は既に夕食を終えたのだらう行儀よく腰掛けてお茶を飲みながら話に花を咲かせてはいるが満員の車内は意外に思えるほど静かである。

果しない広野を走る夜汽車は何故か佻しい。通路の折たみ椅子に腰をおろして闇をみつめていると見えぬはずの光景が走り抜けてゆく。夜明けと共に起き出て野良仕事に精出したにちがいない人達はきっと一日を振返って語り合っているのだらう闇の中を走る燈火が一きわ明るく思える。網戸から入る夜風が心なしか次第に生暖かくなってゆく。長江へ向ってやはり湿度が高くなってゆくのであろう。隣のコンパートメントから時折声が聞えてくる。のぞいてみると盤上で白石と黒石が激しく競い合っている。どうやらこの戦は間もなく終るらしい。10時40分満月の光を集めて悠揚と流れる黄河を渡り長い夜汽車は南へ向ってひた走ってゆく。

熟睡したのだらう5時20分には心地良く眼ざめた。夜が明けて間もないというのに豆畑では草取りに励む多勢の人が腰を折っている。北京でも朝早く職場に急ぐ多勢の人を見たが一体この国の人達は何時に寝て何時に起きるのだらう。大柄ではなくそして痩せ型のこの国の人達の活

力にはいささか頭が下がる。

6時40分朝食の声がかかった。食堂車では4人の先客がうどんらしいものを実に美味そうに食べていた。久しぶりにうどんを食べるのかと思っていたら私達のテーブルに運ばれてきたのはコーヒー牛乳食パンそれにハムエッグスであった。全く予想外の朝食である。コーヒーもパンも私達のために準備されたに違いないが味の方はもう一つといったところである。しかし粥や麵類の朝食に緑茶を飲む習慣を踏襲しているこの国のしかも北京を遠ざかってゆく汽車の中で美味しいコーヒーやパンを期待するのは無理だろう。

強烈な光に浮ぶ果しもない緑野は天与の富を物語っているように見える。「耕やして天に到る」という中国の古くからの諺は車窓から見限り実感としては分らない。それも当然である。北京を出発して既に18時間以上も走り続けてきたというのに未だに第四紀の堆積物の上を走っている。国土の広さそして地質単元の大きさ島国と大陸との差異の余りの大きさに唯何となく打続く単調な風景を見つめていた。陽射しは強く湿度も高くなってゆくらしい。やはり長江流域に近づくにつれて高温多湿の気候にかなり急速に変るのであろう。巨木が広い影を落す小さな池の片隅で何かが蠢いている。列車の轟音に驚いてかそれは一斉に一固まりになって移動した。よく見ると数えきれないほどの家鴨の群であった。見張る人も居ないこの池で目覚めて聞かなかったのかもしれない。

7時35分漢(漢)口に到着した。乗客の多くは



食堂車での朝食

食パン・目玉焼・ミルク・コーヒーなどは特別に食膳に上ったものらしい。右から2人目は冶金専門家の顔懋民氏。女性は通訳の董麗清嬢。

黙々と降りて行った。長いホームの屋根を支える黄色い鉄のアーチ。年老いているらしい駅の建物など。大分市と姉妹都市になっている武漢市への北の玄関には古くからの何かが息づいている。線路に沿う家並の一角に近代的高層住宅が建っている。陽当りの良いベランダにはかなり古めかしい物を置いている家が多いようだ。平家建の軒先近くで食事している人が居る。農業にいそむ人達に比べればやはり都会の人達の朝食は遅いのだろう。終着駅へ向ってゆっくりと走る汽車の窓越しに見える風景の移り変りは北京付近のそれとはかなり異っている。

定刻の午前8時13分 北京駅を出発してから20時間3分の後 終着の武昌駅に到着した。夜汽車の長旅でさぞ疲れることだろうと予想していたが この予想は全くはずれた。北京駅から武昌駅まで 乗務員は連続勤務してきたわけだが 疲れた様子はない。始発から終着までの連続勤務が義務づけられているとしても 彼等が忠実に ひたすら勤務に服している姿を どのように理解したらよいのだろう。同行の通訳嬢の仕事に対する考え方やこの汽車の乗務員の姿 こうしたことは 相通じる目的と強い意志とがない限りとても実現するものではない。近代的なそして大きな武昌駅の建物に向う彼等の足どりは軽く 後ろ姿は清々しかった。

武漢の表情

列車を待つ人で混む武昌駅を通り抜けた正面に 出迎えるマイクロバスが待っていた。一日の活動が始まってまだ間もないのに暑い故か バスの内部は冷房されて

いて実に気持が良い。武漢は南京や重慶と並ぶ中国三大酷暑地として知られ 巷間“雀が焼鳥になって落ちてくる”と伝えられているそうだから 相当に暑くなるのだろう。或る資料によれば 武漢の7月の気温は 最高39℃ 最低19℃ 平均29℃ということだから 短期間で気温が著しく変化するらしい。この様な気温変化に対して どの様な方法で体調を順応させているのだろうか。いろんな意味で興味のある問題ではあるが よくは分らない。古くから「食在広州」と云われるほど 広州(広東)の料理は有名である。この広東料理は高温多湿による体力の消耗を補うことから愛好されるようになったという説があるが もしもこの様な理由で最高に美味しい料理が創造されるのであれば 広州に似通って高温多湿の武漢にもそれなりに工夫された料理があるのかもしれない。もっとも 海に近い広州と内陸に位置する武漢とは組上に上る材料はかなり異なるだろう。旅行の目的とは全く関係のない様なことを思い連ねているうちに バスは深い影を落す並木の道を通り過ぎ 長江(揚子江)大橋を渡った。

この橋は 南京大橋に次いで 解放後第2番目に完成した延長1,670メートルの素晴らしい橋である。幅23メートル 高さ30メートル余りの橋は2層式になっており 上を自動車と人が 下を汽車が通るようになっている。この橋の完成は かつて船を頼りとしていた頃にくらべて 商業活動等を顕著に改変する要因となったことだろう。汽車が走り その上を絶え間なく自動車が走り 輸送量は飛躍的に増加したにちがいないが 土砂を含んだ長江のオレンジ色の水の流れは変わらず そして水面をにる舟も 相変わらずなくてはならない存在らしい。

橋を渡りきった右手に小高い丘がある。亀山と呼ばれるこの丘は 中生代の堆積層によってまろやかに形造られ 北京を離れてからはじめて見る古い地層の丘である。坂道を下り 商店街を通り抜け バスは9時近く 漢口の勝利街にある武汉江汉飯店に到着した。日中の暑さを避けての休息である。

泊り客は既に旅立ったのか 又は部屋にひきこもっているのか このホテルは静まり返っていた。あてがわれたツインベ



武昌駅 古くから武漢三鎮として軍事的にも経済的にも重要視されてきた都市の玄関だけに 駅の建物も立派であり旅客も多い。御当地出身の偉方の写真が飾ってあるのは 強い意識の象徴か？

ッの大きな部屋には クーラーはなく 古びた扇風機が 今に既に過去の思い出の中に残る物となっているとも云えるインクスタンドと並んで 木製の机の上に置いてある。 10時近く 室内の壁に掛けてある温度計は 35°C を示している。 入口のドアとベランダ側の戸を完全に開けても そよ風さえ通り抜けてはくれない。 そのうち 中庭から金属製の大きな物がぶつつかり合うような音が間断なく聞こえはじめた。 すぐ近くで工事でも始まったのだろう。 耳ざわりには違いないが これも部屋の中の暑苦しさも 武漢の成長過程の一齣である。 窓こそないが バスルームはゆったりとした広さである。 大きなバスタブにたっぷりの熱めの湯が 思い切り手足を伸ばした夜汽車の旅で汗ばみ そして煤けた身体にじーんと染み込んでゆく。 将に 百花繚乱の桃源郷に遊ぶ心地である。 しかし 純白の石鹸の泡が身体を一擦りする毎に 汚らしい色に染まり 俗世界に戻されるに時間はかからなかった わずかの時間を惜しみ 湯上りのさっぱりとした気持で 漢口の市街へ出てみた。

漢口は長江の北岸に位置し 南岸に開けた武昌 長江と漢水河に挟まれた漢陽 (漢陽) とともに 武漢市を構成する。 そしてこれらは 古くから「武漢三鎮」として 知られ 経済的にも軍事的にも 要衝の地として重要視されてきた。 長江を唯一の交通路としていた当時と長江大橋完成後とは 恐らく 武漢三鎮の様相はかなり変貌しているに違いない。 広大な国土の開発化は 必然的に奥地へと進んでゆく。 そして 輸送路の確保が急務となる。 かつては差程大きくもない船が武昌から武漢へ あるいは武漢から武昌へ 多種多様の物資を運搬していたことを思うと 長江大橋の経済活動等への貢献は図り知れない。 しかし一方 古くから長江に棹さして生きてきた多くの人達に この橋の完成が与えた影響も決して少なくはなかったろう。 水の流れて生きる民が その場を捨てることも また大地を踏みしめて生きてきた民がその地を捨てて水の流れて生きることも 所詮 悲しくそして辛いことに違いない。

暑い故か 人通りはあまりない。 ホテルを出て間もなく 映画館が目に入った。 活劇ものが上映されているらしいが 昼間は休んでいるようである。 現()代化に向けて前進するこの国では 昼間のんびりと映画を見るなどということは好ましくないかもしれないし むしろ 一人一人

が 昼間は懸命に働くことに生甲斐を抱いているのかもしれない。 因みに 映画を見るためには 数日前に切符を買わねば駄目らしい。 テレビの普及率がかなり低いと思われるこの国では やはり 映画は娯楽の花形なのだろう。 古めかしい家並が続き 近代的な高層の建物は割合に少ないようだ。 そして ここでも乗用車は少なく 自転車やバスが足となっているのは北京と同じだが 北京よりはブラウスにスカート姿の女性が少し多く見受けられる。 これも気候の差異を示す現象の一つなのだろう。 様々な店が軒を連ねている。

偶然に見つけたギョウザ屋は繁盛しているらしい。 日本ではギョウザというと いわゆる焼ギョウザを意味することが多いが ギョウザが 本来 寒い北部地域の代表的な料理の一つであり 年に一度ぐらいしか食膳に上らなかつたいわゆる水ギョウザであることを知っている人は意外に少ないかもしれない。 大きな平鍋の中に入れられた幾分大きめのギョウザは 全く絶え間なく客の胃袋に入ってゆく。 作る人と食べる人のリズムカルな動きは見事だ。 「痩せの大食い」とは古くから云い伝えられてきた諺だが 栄養万点の食事をしていないこの国の人達に 何故 肥満体が少ないのだろう。 ギョウザ屋の近くにこぎれいな電気製品を商う店があった。 店頭飾ってある差程大きくもないカラーテレビの値段はおよそ28万円である。 驚くほど高い値段だが 住居費や生活費がやたらと高く 生活必需品でもない物が安い日本の物価のあり方には疑問を抱かざるを得ない。 ステータスシンボルとしてのいわゆる「三種の神器」はテレビに自転車にミシンと聞いたことがある。 これらの値段にはかなりの開きがあるのだろうが ごく平均的



長江大橋

南京の長江大橋に次いで 解放後第二番目に完成した橋。 下段は鉄道上段は人道と自動車道路になっている。 中国だけの技術と資材を用いて造られたといわれている。 中央は長江 (揚子江) 前面の丘は亀山。

らしいものの値段は自転車が約 25,000 円 ミシンが約 24,000 円らしい。月々の収入からみれば これらの購入は決してたやすいことではなさそうである。

十字路の角に 古めかしい 3 階建のアパートらしいものが建っている。外観は余り手入れされていないように見えるが 内部は それぞれ住む人の好みによって意外と綺麗に使われているのだろう。信号が緑に変わり 向い側に立っていた人達が こちらへやって来る。まだ若そうな女性が乳母車を押して来た。その乳母車の中では 丸々と太った赤ちゃんが にっこりと笑っていた。乳母車は荒削りの板で作った手製であった。恐らく 若い夫が試行錯誤しながら 夜なべ仕事で作ったのだろう。ゆっくりと乳母車を押して行く若妻もそれを手伝ったに違いない。若い夫婦が 乳呑子のために懸命に板を削り 打ちつけ 乳母車を作っている姿が想い出される。通り過ぎて行くその若妻の姿も乳母車も 問もなく熱いものの中にかすんでいった。この赤ちゃんは幸せである。そしてこの夫婦も 乳母車を作る幸せをしみじみとかみしめたことだろう。しかし今の日本では この様な吾が子に対する愛情の表現は きっと物笑いの種になることだろう。乾ききった社会 他人の目を先ず気にしなければならぬ社会が近代文明社会であるとするならば それを拒否したい人は後を絶たないだろうが 敢然と拒否する勇氣を持つ人は少ないのかもしれない。自動車が行く 自転車が行く そして 馬車や人が行く 漢口の表通りを歩き乍ら 道路に屑物が落ちていないことに気がついた。ごみが落ちていないことに気がつくということ を裏返してみれば 普段ごみの多い所で生活しているということに他ならない。北京駅でも石家荘駅でもプラットホームには煙草の吸殻一つ落ちてはいなかったし 掃除夫らしい人の姿も見なかったが 例えば東京ではどうだろうか。人の心とは不思議なものである。一時間ばかりの散歩は終わった。そして 漢口のほんの一部を歩いたにすぎないはずなのに 帰路を辿る折の頭の中では 物の本で知る漢口の歴史の流れの現在への移り変りが 激しく揺れ動いていた。かつては中

国四大鎮の一つであった漢口に 屈辱の日々を送った往時の面影がないことを せめて祈りたい。

昼食までのおよそ 2 時間を利用して 武昌の東にある景勝の地東湖を訪れることになった。マイクロバスは長江大橋を渡って武昌へ行く。漢陽側の亀山と相対する武昌の蛇山は 以前 李白の詩で知られる黄鶴楼という素晴らしい建物があったことで有名であるが 今はその姿はない。しかし その再建が計画されているということだから やがては武漢を一望する蛇山の山腹にその美しい姿を見せることだろう。武昌は 漢口よりも小じんまりとした感じの町であるが この町ほど中国の人々の心の中に生きている町も少ないに違いない。

紀元前 2000 年頃からの中国は 一口に言えば きびしい封建社会の中に生きてきたことになる。そして その中で蔡倫が造紙術を 張衡が地球儀を発明し 紀元 907 年から 960 年の五代十国時代には火薬や羅針盤も発明された。邪馬台国の卑弥乎女王が魏に遣使を出した三国時代は 封建社会の中に興りそして わずか 45 年で雅と化した。時は過ぎ 旧満州族の貧乏貴族の娘として生れた慈禧皇后(西太后)が政権の座を得た 1800 年代の半ば頃から この国の人々は 封建社会の中に芽生えた植民政策の中で 更に苦難を強いられることになった。しかし 3 世紀近くにわたって我が世の春を讀った清王朝は 遂に 1911 年秋 清朝打倒を標榜した革命戦士の武力蜂起を契機として 滅亡への道を進み ここに封建社会の終焉を迎えた。「武昌起義」として知られるこ



漢口市街

3 階建のアパートらしい建物は かなり古い。手製らしい乳母車の中の赤ん坊は丸々と太っている。この乳母車を見ているうちに 何故か目頭が熱くなった。

の蜂起が自由への道を求めた人々に与えた力は図り知れない。武昌はこの様に近代中国の歴史の輝やかしい一頁を飾った町であり また 故毛沢東首席が農民運動の講習所を設立した所でもある。長江近くに建っていたその講習所で懸命に学んだであろう多くの若者は 日夜その偉大な流れと対し 武昌の足跡を振り返って どの様な将来像を画いていたのだろうか。

商店の建並ぶ通りから バスは木立の多い道へ曲った。そして間もなく 広々とした東湖の畔りに出た。東湖は杭州の西湖に劣らぬ景勝で知られ 武漢の人々の憩の場となっている。自動車のチューブを浮袋にして泳ぐ赤パンツの男の子やワンピースの水着で泳ぐ女の子達は皆んな元気一杯である。岸辺の年老いた松柏が影を落とす遊歩道を行く老夫婦がある。大詩人として古くから畏敬されてきた屈原を記念する美しい行吟閣の静かなたたずまいが深い緑に映えて ひととき美しい。湖水を距てて遠くにたなびく煙は おそらく鞍山や包頭と並んで 中国三大鉄鋼コンビナートをなす武漢鉄鋼公司のものであろう。およそ30平方キロメートルの面積を占めるこの工場群の果す役割は大きい。深い林の中には武汉大学をはじめ 多くの学校が点在する。湖畔を巡っての帰途 帰元禅寺に五百羅漢を訪ねた。五百羅漢の中には 必ず自分とよく似た顔があるといわれるが それを見出すゆとりはない。およそ2時間の見学を終って帰り着いたホテルのロビーには 洒落た服装の一群が居た。どうやら いわゆる華僑の人達らしい。経済的には決して豊かでないこの国にとっては 多分 華

僑が落す外貨も貴重であろう。

焼そばを混えた昼食を終えて 目的地への準備にかかった。暑い最中の午後1時半である。

誕生近い銅鉱山

午後2時40分 ホテルを出発したバスは 再び長江を渡って間もなく 東への道を進んだ。山らしい山は見えず きめわてゆるくうねる坂道の両側は広々とした農耕地ではあるが この付近は主として二疊紀末期の地層と これを覆う第四紀の堆積物によって構成されているらしい。午後4時過ぎ 広々とした綿畑が続く道路傍で 小休止することになった。綿畑の一隅には 小さな看板が立っている。その看板には黒地に白で 毛沢東首席が視察した綿畑であるという意味の文字が 美しく書かれていた。湖南省の省都である長沙のおよそ100キロメートル北方の韶山に生れた毛首席は 現代中国の人々を導く多くの著書を執筆しているが その中の名著の一つといわれてきた「湖南省農民運動の視察報告」は武昌で執筆されたものである。今眼前にするこの綿畑の視察も 恐らく彼の著作の糧となったにちがいない。広く深く人と接し 民情を知り 考え 決断しそして実行に移すことの尊さを この小さな看板は強く語りかけているようである。「工業学大慶・農業学大察」というスローガンは 田舎道の故か少ない。

鄂城のダム工事現場を過ぎて間もなく 急峻な山容が目につくようになった。深々と削り取られた山腹に 石灰岩の白い肌が見える。どうやら大冶の鉄鉱床地帯



武昌郊外にある景勝の地 東湖 杭州の西湖よりも はるかに大きい 東湖の畔りには 昔の大詩人である屈原を記念する行吟閣（左前方の建物）が建ち 水遊びに興ずる人達を 監視人（右端）が見守っている。

に入ったらしい。1923年頃丁格蘭が著した「中国鉄鉱誌附図」には 象鼻山から獅子山を経て得道湾に至る鉱床とその東部に位置する大石門から野鷲坪に至る鉱床を中心とする大冶地帯の鉄鉱床の分布が示されているがそのやや詳細な附図には 大規模の鉱床の多くが石灰岩と閃緑岩の接触部に胚胎している様子が示されている。しかし それから既に50年余を経た今は 大冶の鉄鉱床の分布はこの図とは著るしく変っていることだろう。これまでは殆んど見かけなかった人も家も次第に増え 鉱山町らしい様相に変わってはきたが 今も尚重要な鉄鉱山地帯に違いない割には 心なしか活気が足りない様に思える。巨大な露天堀の跡 ラテライトを剥ぎ取ってようやく開発されようとしている鉄鉱床 主要道路から見えるだけでも 大小様々の採掘場は数えきれない程である。漢口を出発しておよそ3時間の後 黄石市にある大冶有色金属会社の宿舎に到着した。

日中の気温が 39°C だったこの夜は強烈にむし暑く汗がとめどもなく吹き出してくる。長江南部の低地帯に位置するここは武漢と同様 高温多湿には違いないが冬の最低気温は -10°C まで下るといわれる。強烈なむし暑さと寒さのほざまで 春と秋の訪ずれに笑をたたえた人々の明るい姿が浮ぶ。しかし 心の和むその季節も 短いことだろう。広い室内はきわめて清潔である。窓に面する机 ゴザを敷いたベッド 洋服ダンス スタンドなど すべてが木製の故か 室内には豊かさが感じられ スチール製品のもつ冷たさやとげとげしさは全く感じられない。出迎えてくれた人達やこの宿舎で働く人達の柔らかな振舞を見ていると 四季に恵まれ

た途方もなく広い大地と そこを流れる悠久の大河に育まれたこの人達と木とは離れ難い様に思える。

無風状態のむし暑い夜 熱めの湯をたっぷりに入れた大きなバスにどっぷりと浸って 汗も垢もすっかり流したはずなのに 窓を開け開いた深夜でさえ ぼたぼたと吹き出る汗が玉となって落ちる。予想以上に体力を消耗しそうだが この様な暑さの中で労働を続ける人達の姿を想い浮べると愚知はこぼせない。

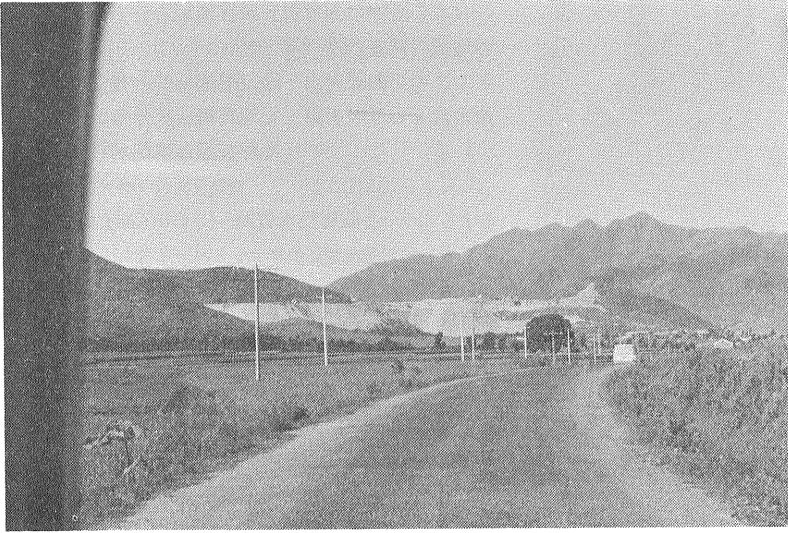
宿舎から目的の鉱山まではおよそ32キロメートルであった。既に鉄道と舗装道路が完成しているこの鉱山は立地条件にきわめて恵まれている。未開発の鉱山とはいえ およそ1,500人が建設業務に従事し 家族を含めて4,000人の宿舎や事務所や公民館が完成しているたゞずまいは 鉱山町そのものである。3階建の鉱山事務所の位置は海拔54メートルということだが この国の地図を広げてみると この海拔高度は信じられない程である。漢口付近の長江の水面は河口よりおよそ70メートルしか高くないといわれているが この両者が直距離にしておよそ700キロメートルも離れていることからみると 長江の水は本当に黄海へ流れているのか疑いたくなるほどである。自然の力には やはり人間には理解され難い 底深いものがあるらしい。

この鉱山の鉱床は 一般に 白亜紀の石灰岩と花崗閃緑斑岩との接触部に胚胎するスカルン型銅鉱床として知られているが その性状は単純ではないらしい。接触部に胚胎するスカルン型鉱床が最も重要であることには違いないが どうやら岩質の異なる石灰質岩層の境界部や割目 そして貫入岩体内にも顕著な鉱化作用が認められている。どの鉱床にもモリブデンが伴われ 貫入岩体の周縁部付近には 単味の輝水鉛鉱脈がみられる。この鉱床の開発が進むにつれて その地質・地質構造と鉱床の性状との関係は 多くの人の関心と呼ぶことだろう。「石灰岩と花崗閃緑斑岩との接触部に胚胎するスカルン型鉱床」と呼ぶには余りにも複雑な性状をもつ鉱床らしい。

説明を聞き 開発準備中の現場を見 そして質疑応答を繰返す。早朝に起出て夕刻までこれらが続き 日によっては更に午前0時頃まで討議が続けられ



湖北省黄石市にある 大冶有色金属会社の宿舎。
マイクロバスは移動用。



開発間近い銅山口の銅鉱床付近の地形
採掘準備が進みベンチが造られている。
後方の山の最高点は海拔約400m。
路面は海拔約50m。

た。一つの事業達成に共通の目的をもつ日本側と中国側の熱意はより良い技術合作の実現を目指して昼夜を分たず燃え盛る。

銅山口に位置するこの鉱山の調査はきわめて短い時間ではあったが和やかにそして熱気に満ちて終わった。相変わらず暑い夜遅くまで電燈の灯る宿舎では日本語と中国語の歌が飛び交い和やかに更けていった。晴れ渡る空の碧さと鮮やかな緑をバックにくっきりと浮ぶ鉱山事務所 従業員宿舎 山腹に建設中の選鉱場そして銅山川を隔てる露天堀のベンチ 静かな田園風景の中に誕生しつつあるこの鉱山は云わば現在の中国の一つの象徴と見えないこともない。



採掘ベンチから建設中の選鉱場を見る。
ベンチの高さは12m。右端の白い塔の様に見えるのはボーリングの樽。

「四つの現代化」の中で重要視される農業の発展と鉱物資源の開発とはそのおかれる環境によっては皮相的には相反するようにみられがちではあるが双方が互に必要な欠くことのできない存在であることは確かである建設現場で石ころを一つ一つ手で敷きつめている人の姿があった。大型機械を使えば能率的だとは思いますがその様な建設機械が不足しているのかまたは働くことを基本とするこの国の方針がこの様な形で生かされているのかよくは判らない。



鉱山事務所。